

## 研究支援報告

研究課題名：子どもが生き生きする活動（特別活動）

研究代表者：広島市立亀崎小学校教諭 野地香苗

### こいかつ冬の学習会 ～いまこそ特活に目覚めよ!!～

日時 2020年1月13日（月）13：00～16：35

主催 広島県特別活動研究会グループ「こいかつ」

後援 広島文教大学教育学会

概要

#### 1. 司会挨拶

#### 2. 会場校代表挨拶

#### 3. こいかつの歩み

#### 4. 講話 講師：東京都東大和市立第六小学校 校長

田村亜紀子先生

- ・算数も特活も同じ。問題解決型：自力→グループ→全体→わかったこと→まとめ→練習何が違うか：教科では学ばせないといけないことが決まっている。

特活では子供が自分達でやりたいことを見つけることがスタート。教員はあくまでコーディネート役。

- ・子どもは7時間学校にいるうちの3時間半が授業の時間。つまり残りの3時間45分は勉強以外のことしている。そこで人間関係や規則、社会のしくみなどを学んでいく。35時間だけではない。
- ・特活は目標の最初に「集団や社会の形成者…」とある。→教育の目的そのもの。
- ・話し合いはあくまでも学活の手法であり、そこで決めたことをどう実践していくかが大切。
- ・学級会の話型の提示はある程度したほうがい

い。ただ、話し方聞き方は国語の中でやって行くべきこと。学級会の中で話型を教えていくことはあまりすべきではない。

- ・全員が1つの意見に賛成してまとめるというのはほとんど難しい。大切なことは全員がその意見に「納得」するか、「了承」を得られるか。「みんなが決めたことだからいいか。」と感じられる学級の風土を作ることが大切。
- ・決めることに意義があるのではなく、その先がある。そこに「自分」や「友達」、「学級」がどうかかわっていくか。その中で見つけた課題が次の実践課題となっていく。

#### 5. 講話 講師：東京都八王子市立浅川小学校 校長清水弘美先生

- ・特別活動に必要なもの「みんな」「クリエイティブにつくる」「楽しい」というワード。
- ・学習指導要領の前文では、自分のよさを知ることができる、他者の価値を尊ぶ、多様な人々と協同できるように、豊かな人生を切り開く自分、持続可能な社会をつくることができるようにすることが求められる。
- ・学びの柱の3つ知識・技能……教える。思考

力・判断力・表現力……鍛える。そうすると自動的に児童が育っていく。

・特別活動では知識・技能として集団活動の意義や行動様式、学級会のやりかたなどを教える。鍛えるものとして、課題発見力、意思決定力、合意形成がある。そうすることで生活や人間関係をよりよく形成していく態度が育っていく。

・コミュニケーション能力は、自分の言いたいことをちゃんと相手に言えること、相手が言いたいことをちゃんと受けとめられること。その間で、き裂が起きないで何とかつないで。

・特活を実践する上のコア一連の活動 **feel-imagine-do-share**

**feel**：課題の発見……心がゆれるようなアンテナを立てる。**feel**することできないと子どもは学びに入ることができない。

**imagine**：どうなりたいか、想像していく。

**imagine**の中で意思決定したり、合意形成したりする。

**do**：実践する。役割が必要。全ての子に役割がある。苦楽しい。自分の得意を生かしたり、協力したりすることが行われる。

**share**：ふり返り。目的に向けて、自分の活躍・友達の活躍、みんなの成長、次への課題を言葉にして発信する。

・特別活動でアクティブラーナーを育てていくと、教科がいきいきし知識がつく。質が高まり、いろいろなことが分かる子どもになる。そうしたら特別活動がまたできる子になる。これをくり返していくと色々なところで活躍できる子どもになり、キャリア教育につながる。

・特活はパソコンのOS作り。大事なポイントは意思決定と合意形成。実践のポイントは自己実現と社会参画と人間関係形成。

## 6. お悩み相談会

Q. 子供が衝突した場面で、どのように解決していったらいいのか。

A. 殴り合うか話し合うかしかない。安全管理上、暴力になったら止めるが、それ以外はとことん話し合わせる。中学年の女の子は仲間はずれがあるが、その原因はたいてい勝手な想像。きちんと話を聞いてあげる。「～くれない。」「～していた。」と言ってくる子には「それであなたは何をしたの?」と聞く。自分で解決する方に向くようにしていく。

Q. クラスになじめない子がいるときの手立て。同様に他の子に認められにくい子には。

A. 3年生は自分を優位に立たせたいという思いが強くなる。自分ではできているけど、出来ていない子のことを強く責めたい。注意するのは先生、ということ伝える。楽しいことを自治的に取り組めるようにする。直すことばかりに目を向けない。特別支援的な子にも輝く場面はたくさんある。しんどい子と教師の人間関係をしっかり作っていく。音を立てる子、しゃべる子は不安が大きい。不安がありながらもそこに頑張っていることを認めてあげる。受け止めてあげる。

Q. 学級活動をどのように行っていけばいいのか。

A. 何かをする時に決めなければいけないことを全て話し合うことは無理。低学年の時は「何をするか」、中学年はそこに「工夫」を加えていくなど、少しずつ話し合える量を増やしていく。

話し合い活動は話し合い方を「教える」ということから始める。15分でいいので、上の学年の学級会を下の学年に見学させるこ

とも効果的。話し合うということが楽しいことにつながっていくという経験を積ませる。学級会の基本を教えながら、子どもに合った形を見つけていく。

学級会はオリエンテーションが大切。「学級会とは何か」から教える。学級会とは、みんなの願いを叶えるもの。学級会の成功、失敗は準備（計画委員会）が8割。準備の仕方は国語の時間を使って全体で指導してしまえばいい。模擬学級会などもいい。国語で話し合い方は勉強するが、それまでの学年でどれだけ経験させ、知識として持たせておくかということも大切。

## 7. 司会挨拶

### 研修会を終えて

#### ①質問紙調査集計結果の報告

##### 1. 目的

近年、学習動機づけ研究において、ワーク・エンゲージメントという概念が注目されている。ワーク・エンゲージメントとは、仕事や研究等の「学びに対するポジティブで充実した心理状態」であり、活力（vigor）、熱意（dedication）、没頭（absorption）から構成されている（Shimazu et al., 2008；島津、2010）。ワーク・エンゲージメント（活力および熱意、没頭）水準が高くなるにつれて、学びに誇り（やりがい）を感じ、熱心に取り組み、学びから活力を得て生き生きとしていることができると考えられている（島津、2010）。

そこで、「広島文教大学教育学会研究支援事業」の一環として開催された「こいつ冬の学習会2nd」の参加者を対象として、学習会でのワーク・エンゲージメント水準を検討するために、Shimazu et al. (2008) が開発した日本版

ワーク・エンゲージメント尺度（短縮版）を用いた質問紙調査を実施した。

## 2. 方法

(1) 対象 有効回答者42名

(2) 手続き 以下に示す3観点9項目の質問に対して、「1：まったく当てはまらない」「2：当てはまらない」「3：どちらでもない」「4：当てはまる」「5：とてもよく当てはまる」の5件法で回答を求めた。

①活力は、学びから高い水準のエネルギーを獲得し、生き活きとしている心理状態と定義し、「こいつ学習会に参加して、気持ちがはつらつとしている」等の3項目を用いた。

②熱意は、学びへの強い関与や誇りを有している心理状態と定義し、「こいつ学習会に、意義や価値を大いに感じる」等の3項目を用いた。

③没頭は、学びへの集中と没入を示している心理状態と定義し、「こいつ学習会に参加していると、時間がたつのが速い」等の3項目を用いた。

## 3. 結果

Table 1 は、各観点の平均値（Mean）と標準偏差（SD）を示したものである。活力および熱意、没頭の観点の平均値間の差を検討するため、1要因分散分析（参加者内）を行った。その結果、3観点の平均値に有意な差が認められた（ $F(2, 82) = 8.27, p < .01, effect\ size\ f = 0.45$ ）。Holm 法による多重比較を行ったところ、熱意および没頭の平均値は、活力の平均値よりも高いことが示された（ $MSe = 0.07, p < .05$ ）。

Table 1 各観点の平均値と標準偏差 (N=42)

観点	Mean	SD
活力	4.39	0.58
熱意	4.63	0.41
没頭	4.54	0.50

#### 4. 考察

観点間の平均値には有意な差が認められたが、3観点ともに肯定的評価（平均4以上）を示していることから、特別活動界のパイオニア2名の講演および悩み相談で構成された「こいかつ冬の学習会2nd」は、参加者にとって概ね充実した学びであったことが明らかとなった。また、結果から、「特別活動で子どもがいきいきする活動に寄与し得る」という学びへの強い関与や誇りを有し、学びに集中・没入している心理状態であったことが考えられる。しかしながら、参加者自身が学びからエネルギーを獲得し、活き活きとしたエネルギーを蓄えることが今後の課題として挙げられる。そのため、次回以降の学習会では、さらに企画内容・運営方法を工夫することで、こうした課題を改善することが求められる。

##### ②こいかつ事務局のふり返り

「子どもが生き生きする活動」を一人でも多くの若手の先生方に広めたいという思いをもち、「こいかつ」は活動してきました。今回、広島文教大学の事業を利用させていただいたことで、特別活動に詳しい先生方をお招きし、講話をお聞きすることができました。その機会があったからこそ、特別活動が一段と身近で必要性のあることであると多くの方に広めることができたように感じます。日頃現場で働く中で、悩んでいてもすぐに打ち明けられない、自分だけが

困っているかもしれないなどと、悩みや不安を打ち明ける場というのはなかなかありません。だからこそ、今回の学習会の内容である「お悩み相談会」では多くの悩みを出していただき、その悩みに対する具体的な答えを講師の先生方にお答えいただいたことにより、より現場に生かすことができる方法を教えていただくことができたように思います。参加して下さった先生の方も、「特別活動のことが全然分からないままやっていたけど、今日の話聞いてすごくよく分かった。」「特別活動を学校全体で取り組んでいくことが大事であることを再認識できた。」「自分と同じ悩みをもっている人がいることが分かり、いろいろな方法を試しながら、これからもがんばっていきたいと思った。」などと、とても前向きな感想をもってくださっていることが分かり、開催した私たちとしても、とても大きな成果だと思いました。

これからも日々子ども達と向き合う中で悩みや迷いは必ずあります。だからこそ、このような機会を設け、若手の先生方にとって気軽に参加でき、悩みや迷いを打ち明けることができる場をこれからも提供していきたいと思っています。だからこそ、私たちはそれぞれの場で実践を積み重ね、子ども達のよりよい学校生活に向けて教師としての力量を高めていきたいと思えます。

#### 【引用文献】

- Shimazu A, Schaufeli WB, Kosugi S, et al (2008) Work engagement in Japan: Validation of the Japanese version of Utrecht Work Engagement Scale. *Applied Psychology*, 57, 510-523.
- 島津明人 (2010) ワーク・エンゲージメントに注目した自助と互助. *総合病院精神医学*22, 20-26.